



保育の現場から

子どもたちの心に目を向けて

白石 肇

三歳児の生活

「先生、まだ遊べる？」

四月、不安いっぱいに登園していた子どもたちも、六月になると、「もっと遊びたい」という気持ちがいっぱいになってきました。兵庫教育大学附属幼稚園には登園後から十時三十分くらいまで、自分の好きな遊びをする「うれしのタイム」という時間があります。教師は季節や時期によって、意図的に遊びの環境

を変化させます。また、一人ひとりの子どもが個性を発揮しながら遊ぶ場や、友達とのさまざまなやりとりをしながら仲間関係を築いていく場など、多くの経験や体験をしていけるようにという願いを込めて、遊びの場を作っています。

「うれしのタイム」で、三歳児の子どもたちは、保育室の南側にある園庭（南園庭）で遊ぶことが大好きです。その中でも、砂場は子どもたちに大人気の遊び場です。そこで、ごちそう作りをしたり、山や川を作っ

たり、穴を掘ったりして遊んでいます。ごちそう作りでは、「カレーできたよ」「うどんができました」「アイスもあるよ」と、お皿やお椀に盛った砂をいろいろな物に見立てています。「先生に見てほしい」「先生に食べてほしい」と、目をきらきら輝かせながら、思い思いのごちそうを見せてくれます。できたごちそうを教師が食べるのを見ると、うれしそうなお表情を見せて、再びごちそうを作ります。繰り返しごちそうを作ること、手で砂の感触を確かめながら遊ぶことが楽しいようです。また、自分の思いでいろいろな物に変身する「砂」に、繰り返し触れて遊ぶことで、心を落ち着かせ、じっくりと遊ぶ経験をしているようです。

さあ、水遊びをしよう

六月下旬となり、気温もどんどん上がり、水の心地よさを感じることができるようになりました。そこで砂、水に存分に触れて遊べるように、登園後、持ち物

の始末を済ませた子どもから、水着に着替えて遊べるようにしました。タライやペットボトルで作ったジョウロをたくさん準備しておき、南園庭で子どもたちと水を掛け合せて、思いっきり水遊びをしよう、私は楽しみにしていました。ところが、子どもたちはタライの周りに集まり、「うずまきができたよ」「メロンジュースができました」などと、水やり用の小さなペットボトルで水をすくったり、タライの中に水を流したりして遊び始めました。また、「水が速いね」「新幹線みたいだよ」「下(砂場)にどんどん水がたまっていくよ」と、砂場にある樋たがひにカップで繰り返し水を流して遊んでいました。そして、遊びに夢中になると、ひざをつき、おしりをつき、手で水の感触を何度も確かめるように遊んでいました。この時、私と子どもたちになきなずれがあることに気づきました。私は水着になった子どもたちと全身で水の感触を楽しんで、水を掛け合せて遊ぶことを予想していました。しかし、子

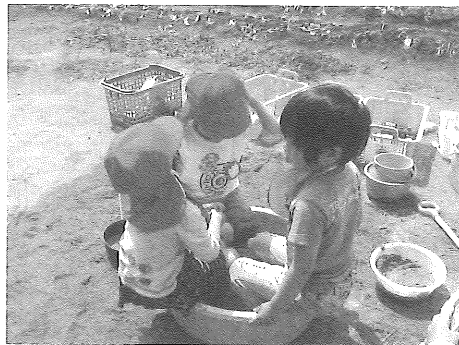
どもたちは、もっと自分の手や足で水に触れてみたい
と思っていたようです（これまでもタライの水を、
カップや水やり用の小さなペットボトルで、すくつた
り流したりして遊ぶ姿が見られました）。砂と同様、
自分の思いでいろいろな物に変身する「水」に触れて
遊ぶことに興味をもっていたのです。

翌日、タライや子どもの手に合う小さなカップ、ペッ
トボトルを増やしておきました。そして、私も子ども
たちと一緒に、水をすくつたり、流したりする遊びに
加わりました。「先生、ここにおいで」「こうやって
（水を）すくってごらん」「冷たくて気持ちいいでしょ
う?」「（水が）きらきらしているでしょう? きれい
だね」など、子どもたちは感じたことを口々に言いな
がら、水に触れて遊んでいました。そして、タライの
周りで遊んでいると「ちよつと足を入れてみよう」
「手でも水がすくえるよ」など、少しずつ、直接、身
体で水に触れてダイナミックに遊ぶ姿が見られるよう

になりました。

その後も、しばら
く、タライの周りで
の水遊びが続きまし
た。水を掛け合うの
ではなく、手足で水
の感触を確かめるよ
うに、カップなどで
水をすくつたり流し
たりする遊びをして

いました。入園当初、自分の好きな遊びをなかなか見
つけることができなかつたAさんも、タライの周りで
する水遊びが大好きになりました。小さなペットボ
トルで水をすくつては、タライの中に水を流すことを、
繰り返ししていました。また、ペットボトルが水に浮く
ことに気づくと、手で水をかいて「先生、見て見て。
船だよ」とうれしそうに声をかけてきました。「先



生、船を作る」と、製作コーナーでスチレン皿を見つけてくるなど、自分で興味のあることを見つけて遊ぶ姿も見られるようになりました。

Bさんは、入園当初、室内で遊ぶことが多く、教師が誘いかけても戸外で遊ぶことが少なかった子どもです。しかし、水遊びをきっかけに、戸外に出てくるようになり、桶に水を繰り返し流すことに興味を持ち、登園後、自分から戸外に出て遊ぶようになりました。一学期、砂や水にじつくりと触れ合って遊ぶことで、子どもたちは園生活に慣れて落ち着くだけでなく、自分の思いを出したり、ダイナミックに遊んだりするきっかけにもなっているようです。

プール開き

六月最終週、プール開きとなりました。園には横六メートル、縦八メートルの大きなプールがあります。

しかし、三歳児の子どもたちが、いきなりそのプール

で遊ぶと、恐怖心を抱くかもしれないので、まずは南園庭に簡易プールを出して遊ぶことにしました。

実際、簡易プールに入ってみると、水を怖がる子どもたちもいました。特に、顔にかかることを嫌がる子どもが多く、Aさんもその一人でした。そこで、水遊びで使っていた小さなカップやペットボトルを、以前作っておいたペットボトルジョウロに変えて、水遊びでしていたことを簡易プールの中でも行えるようにしました。また、簡易プールの中を歩いたり、ジャンプしたり、しゃがんだり、また、手で水をすくったり、水を身体に掛けたりしながら、少しずつ水に慣れて遊べるようにしました。水遊びの時、手足で水の感触を確かめるように遊んでいたように、簡易プールの中でも、身体全体で水の感触を確かめながら遊ぶ姿が見られるようになりました。水の中で手遊びをしたり、動いたりすることで、顔や頭にも自然と水が掛かるようになりました。



また、「先生に掛けていいよ」と、私めがけて思いつきり水を掛ける遊びも、子どもたちは大好きになりました。水を掛けるだけでなく、自分にも水が掛かる経験を遊びながらしていきました。Aさ

んも水を掛けて遊ぶことには興味をもち、喜んで私に水を掛けていました。

そして、私から子どもたちに水を掛ける遊びもしました。水への抵抗に個人差があるので、簡易プールの周りに並んでいる子どもたち一人ひとりに水を掛けました。「先生、顔に掛けていいよ」「背中とおしりだけにして」「顔を手で覆ったり、後ろ向きになつたりし

ながら）掛けてもいいよ」など、自分からどこに水を掛けてほしいのか、子どもたちはリクエストをしていました。Aさんは顔に掛かることは嫌がっていました。が、後ろ向きになってから、「掛けても）いいよ」と水を掛けられる経験もしました。簡易プールで遊ぶことで、最初のころ、水に抵抗をもっていた子どもたちも、少しずつ慣れていく姿が見られるようになりました。

大きなプールへ遊びに行こう！

七月になって、四、五歳児が大きなプールで遊ぶ様子を見て、「あっちのプールには行かないの？」と尋ねてくる子どもがいました。私から「みんなもあっちのプールで遊んでみる？」と声をかけると、多くの子どもたちは「行きたい」「遊びたい」という反応でした。Bさんも「行ってみたい」と喜んでいました。簡易プールである程度慣れた後は、大きなプールで遊ぶ計画を



していました。しかし、大きなプールに抵抗を示す幼児が出てくるのではないかと予想していたので、子どもたちが大きなプールでも楽しめるような活動を、考えておくことにしました。

水遊びの時、Aさんたちが楽しんでいたペットボトルを水に浮かべる遊びや、タライにストレッチ皿などを浮かべる遊びからヒントを得て、牛乳パックで大きなかだを作っておきました。そして広くて大きなプールに浮かべて、そこに乗って遊ぶことにしました。プールの中

に入ることを怖がっていた子どもたちも、教師と一緒にそのいかだに乗って遊ぶことができました。Aさんもちかだに乗ることは大好きで、プールのたびに「今日もいかだに乗りたい」と、教師に話していました。

水遊びを始めた六月下旬、子どもたちとのずれを感じてからは、「子どもたちは何を楽しんでいるのか」「どうしてこんなことをしているのか」と、目に見えるものの裏側に隠された子どもたちの心の中に、目を向けることを心掛けました。水遊びから、子どもたちはどんなことを楽しみ、どんな経験をしているのか、その実態から、プール遊びはどのように展開すべきなのか、子どもたちから学ばせてもらいました。今後、子どもたちの心に目を向けて、子どもの実態から保育を計画していけるようになりたいです。

(元兵庫教育大学附属幼稚園・

現宝塚市立西山幼稚園教諭)